

## 2000年度日本気象学会奨励賞の受賞者決まる

**受賞者:**加藤 廣 (仙台管区気象台)

**研究題目:**東北地方の気象特性と予報精度向上のための研究

**選定理由:**加藤廣会員は、1981年に気象庁福島地方気象台に採用された後、主に東北地方の地方官署で現業業務の傍ら、様々なテーマで研究・調査に取り組み、その成果を気象庁研究時報別冊や地区調査研究会誌に報告してきた。

研究テーマは、特に地方に特有な現象を取り上げており、近年は、秋田県の気象について様々な視点から調査している。一例として、秋田県内の冬季の降水分布特性を調査し、その局地性を指摘している。さらに、数値予報モデルで細かい地形の効果の表現が不十分な点を補うために、降水分布と下層風向との関係を調べ、その成果を数値予報格子点値の改善に活かす手法を提案した。この手法は、管内各地方気象台の予報作業にも取り入れられている。

また、東北地方で短時間強雨をもたらした複数の事例について解析を進めている。その結果のひとつとして、前線近傍で発生する強雨においては、前線の南側から下層への暖湿気塊の流入が対流不安定を強化しており、前線の北側から上・中層への乾燥気塊の流入が不安定をさらに強化する例があることを見出した。そして、これらが強雨発生につながる着目すべき条件であると指摘している。

こうした一連の研究は、予報現場において予報精度を向上させることを通じて、気象災害の軽減に寄与するものである。また、事例解析の結果は、解析例の比較的少ない北日本の強雨について気象学的に興味深い知見を提供するものである。よって、日本気象学会は加藤廣会員に奨励賞を贈るものである。

### 参 考 文 献

- 加藤 廣, 1994: 秋田県の冬季降水量予想, その1, 平成6年度仙台管区調査研究会資料, 35-36.  
 加藤 廣, 1994: 秋田県の冬季降水量予想, その2, 平成6年度仙台管区調査研究会資料, 37-38.  
 加藤 廣, 1995: 秋田の天気特性(冬), 研究時報, 47, 別冊, 40-41.  
 加藤 廣, 1996: 1995年8月25~26日の短時間強雨の事例解析, 研究時報, 48, 別冊, 30-31.

加藤 廣, 1997: 1997年1月22日秋田県の西海上を南下した渦状じょう乱の事例解析, 研究時報, 49, 別冊, 30-31.

加藤 廣, 1998: 秋田県南部で発生した短時間強雨, 研究時報, 50, 別冊, 32-33.

**受賞者:**黒良龍太 (広島地方気象台)

**研究題目:**中国地方における対流性降水と大気安定度指数に関する統計的研究

**選定理由:**黒良龍太会員は、1986年に気象庁神戸海洋気象台に勤務し、その後1994年に松江、1998年に広島各地方気象台で予報業務の現場に勤務する中で、中国地方特有の現象を解析し、その多数の成果を気象庁研究時報、大阪管区府県研究会誌等に発表してきた。

黒良会員は、中国地方での対流雲に伴う短時間強雨や発雷と大気安定度指数に関する研究を1994年から継続している。これらの現象の予報精度向上のため、各種大気安定度指数(SLI, Lifted Index, CAPE, Richardson 数等)において発雷予測に最適な閾値を統計的に求め、それぞれの優劣や特性を調査し、独立資料を使って検証した。CAPEには標準的な計算方法がないため、熱雷発生に適した気塊の物理量や高度の決め方などを考察した。

さらに、対流雲の発生主因と合致するCAPEの計算手法の改良を試み、冬季山陰沖で寒気移流が原因で発生する雷雲については、海水温を考慮したCAPEと類似した指数を考案し、精度向上の成果を得た。その他、年別に熱雷予測の最適なCAPEの閾値を求め、ある年では他の年に比べこの閾値が大きく異なることを示し、ポテンシャル的な手法では予測に限界があることを明らかにした。

黒良会員が取り組んできたこれらの調査・研究によって気象学的に貴重な知見が得られており、その成果は不安定性降水予測の基礎資料として利用され、中国地方の予報精度向上に反映されている。よって、日本気象学会は黒良龍太会員に奨励賞を贈るものである。

### 参 考 文 献

- 黒良龍太, 1994: 島根県の不安定性降水におけるCAPE

の利用について、平成6年度大阪管区府県研究会誌、316-317.

黒良龍太、1995：CAPEの計算における仮温度補正の効果、平成7年度大阪管区府県研究会誌、332-333.

黒良龍太、1996：不安定降水に関する大気成層状態の指数について、平成8年度大阪管区府県研究会誌、344-345.

黒良龍太、1997：中国地方の熱雷と安定度に関する指数、研究時報、49、別冊、168-169.

黒良龍太、1997：中国地方における冬季の寒気移流による発雷と安定度に関する指数、平成9年度大阪管区府県研究会誌、396-397

黒良龍太、1998：中国地方の発雷と安定度に関する指数、研究時報、50、別冊、174-175.

## シンポジウム「地球温暖化と季節推移」のお知らせ

「地球温暖化が人間活動によって生じた」と定句のようになった今日、人間活動による温暖化によって季節はどのように変わってきたのか。季節推移は気候変動の側面であるばかりでなく、経年的な変動よりも季節変化が引き起こす課題に焦点を合わせる場合、また人工気候によって季節推移する場合にも課題として登場する。これらの意味には大なり小なり人間生活が係わるので、エネルギー消費を経て地球温暖化につながる事が明らかである。かくして「地球温暖化と季節推移」は時宜を得て格好の課題であることが理解される。」

上記趣旨のもとで、いわゆる地球温暖化現象が季節変化に及ぼす影響について、植物季節、都市気候やエネルギー消費の立場から議論を深めるシンポジウムを企画しました。ふるってご参加下さい。

名称：シンポジウム「地球温暖化と季節推移」

日時：2000年10月21日（土）10時～18時

会場：龍谷大学深草学舎21号館501号室  
京都市伏見区深草塚本町67

主催：気候影響・利用研究会

共催：日本農業気象学会近畿支部、日本農業気象学  
気候変化影響研究部会、日本建築学会近畿支部

後援：日本気象学会、日本気象学会関西支部、日本  
生気象学会、空気調和・衛生工学会近畿支部  
(申請中のものを含む)

プログラム：

☆主催者挨拶

気候影響・利用研究会会長 川崎 健

☆一般講演

- ・生物季節による日本の季節区分：  
河村 武（愛知産業大学）
- ・ウメ開花日からみた日本の冬季天候経過の年々変  
動：  
河合隆繁（日本大学）

・気候変動に伴う影響検出に関する研究

—日本における影響の検出—

山本佳香（慶応義塾大学）

・生活と健康の季節依存性—温暖化の影響—

佐々木昭彦（国立公衆衛生院）

☆シンポジウム基調講演

・‘とってすてる’しかないCO<sub>2</sub>? :

山口克人（大阪大学）

☆シンポジウム招待講演

・温暖化と植物季節： 朴 恵淑（三重大学）

・生物季節観測と季節推移： 森 秀雄（気象庁）

・サクラの開花の季節推移：

青野靖之（大阪府立大学）

・都市環境のクリマアトラス： 森山正和（神戸大学）

・夜間冷気形成と夏季の防暑法：

芝池英樹（京都工芸繊維大学）

・体感の季節推移と新サマータイム：

中村泰人（熊本県立大学）

☆総合討論

備考：

・参加費は無料ですが、予稿集を当日販売します  
(共催・後援学会員500円、一般1000円)。

・懇親会を18：30より龍谷大紫英館6階グレルにて行  
います(会費4,000円、当日受付可)。

問い合わせ先：

「地球温暖化と季節推移」シンポジウム

実行委員会事務局

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

龍谷大学経済学部 増田啓子

Tel: 075-645-8580, Fax: 075-643-8510,

E-mail: keiko@econ.ryukoku.ac.jp

ホームページ (<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/jsgcia/index.html>)